成吉思汗によつて開かれた蒙古族の活動はその後一世紀の經過において驚くべき成績を示し、遂にアジヤの大半とヨーロッパの東部とはその領有に歸し、北方民族の飛躍はこゝに有史以來の極盛期に達した。北方民族が射獵遊牧の本據地の外に、定住の人民やその土地を占領して統治する情態に進展したことは、前に契丹・女眞族の發展において論述したところである。

その後を襲うた蒙古族も、獨り支那においてのみならず中亞においてもペルシャにおいてもロシヤ地方においても、同樣にその土地人民を自から統治し、蒙古族の統治する國家を建設する方針を取ることになつたのは、彼等の文化の大なる發展として注意しなければならぬことである。

元の一統の意義

尤も彼等の興起の初期には、その侵略は單なる奪掠行爲に過ぎなかつたし、その後においても僅にこれに一歩を進めて、その征服地に對して監視の態度を執るに過ぎない時期もあつたのであるが、漸次かゝる情態から進んで、自からその統治に任ずるに至つたのである。

今暫く問題を東方に限つて觀察することにするが、忽必烈の時、蒙古が元と稱し、我が後宇多天皇の御宇、西紀一二七六年に宋を殄滅して支那全土を統一したことは、簡單に支那史上に頻出する易姓革命の常事としてのみ觀過してはならぬ。何となればこの一統たるや、東方アジヤにおいて有史以來不斷の顯著なる事實として認められる南北兩民族の鬪爭が、こゝに北方民族の大勝利として一旦大團圓の幕を下すに至つた一大事件であるからである。